

『古今和歌集』の歌語における男女性と和歌表現

——「離る」について——

寶 槻 たまき

はじめに

『古今集』には、男性歌人が「女の立場で詠んだ」と指摘される歌が散見する。これらの中には、女の立場で詠んだ蓋然性が高い歌もある一方、男女どちらの立場で詠んだと考へても解釈できる、女の立場で詠んだと解する根拠が示されないなど、問題を有する歌も多い。本論文では、注釈書によつて男性歌人が「女の立場で詠んだ」と指摘される歌のうち、四首に共通して用いられる「離る（かる）」という歌語に注目する。「離る」という語の有する男女性について検討し、女の立場で詠んだと解される理由や、男女倒錯歌の実態について考察する。

一 『古今集』における「女の立場で詠んだ歌」

まずはじめに、『古今集』において男性歌人が女の立場で詠んだ歌について確認しておきたい。男性歌人が女の立場で詠んだ蓋然性が高いものとして、次のような歌を確認することができる。

藤原敏行朝臣の業平朝臣の家なりける女をあひしりて文つ

かはせりけることばに、今まうで来、雨の降りけるをなむ
見わづらひ待ると言へりけるを聞きて、かの女にかはりて
よめりける 在原業平

（恋四・七〇五）

この歌は、詞書に「かの女にかはりてよめりける」とあることから、男性歌人である業平が、近い女性に代わつて敏行に詠んだ歌であることがわかる。実際の男女の贈答歌として、男性歌人が女の立場で詠んだ歌が『古今集』に収載されていることが確認できる。

また、次に掲げる歌は題知らずで詠歌状況は不明だが、女の立場で詠まれた蓋然性が高い。

題しらず 僧正遍昭

わが宿は道もなきまで荒れにけりつれなき人を待つとせしまに
（恋五・七七〇）

「つれなき人を待つ」と詠むこの歌からは、荒廃した邸で男の訪

『古今集』の注釈書の記述を見比べてみると、積極的に女歌である可能性を模索するものや、男女どちらの立場で詠まれたかに触れないもの、語釈や評に指摘はないが、通釈から女の立場で解釈していると窺えるものなど様々である。その中で、諸注釈書がこれらの歌を男女どちらの立場で詠まれたと解釈しているか、判断できる

竹岡全評釈					作者の性別	45
全集					男	315
松田新釈					男	338
窪田評釈					女	623
金子評釈					男	686
						704
						710
						716
					女	790
					女	791
					男	799
						800
					男	969

[illegible]

小町谷校注			女		女	男	女	女		女	男
-------	--	--	---	--	---	---	---	---	--	---	---

※2 男女どちらの立場か不明なもの、恋の文脈を読み取らないものは空欄にした。

①「女の立場で詠んだ」と指摘される「離る（かる）」を詠んだ歌

〈男性歌人が「女の立場で詠んだ」と指摘される歌〉

冬の歌としてよめる 源宗于朝臣

① 山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば
(冬・三二五)

物へまかりける人を待ちてしはすのつごもりによめる 躬恒

② わが待たぬ年はきぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず
(冬・三三八)

題しらず 凡河内躬恒

③ かれはてむのちをば知らで夏草の深くも人のおもほゆるかな
(恋四・六八六)

題しらず 素性法師

④ 思ふとも離れなむ人をいかげむあかず散りぬる花とこそ見ぬ
(恋五・七九九)

右に掲げたのは、『古今集』の注釈書によって女の立場で詠まれた可能性が指摘される男性歌人の歌である。①②は冬の巻に収載されているためか、多くの注釈書は男女の立場について言及していない。

①は、草も枯れ、人の訪れも「離れ」てしまう山里の寂しさを詠んでいる。また、②に詠まれる「離れにし人」は、詞書の「物へまかりける人」を意味する。待ちもしない新年はやってきたが、どこかへ出かけて行った「離れにし人」は訪れもしない、と詠んでいる。

①も②も、人が訪れることを望む立場で詠まれており、この歌に恋の要素が盛り込まれていると解すれば、男の訪れを待つ女の立場になって詠んだと解することが可能である。その場合、この二首は女が男の訪れを待つ体裁を取り、恋歌風に詠んだ歌と考えられる。

一方で、『古今集』においては恋部ではなく、あくまで冬の巻に収載されていることから、恋の要素を読み取る必要はないとも考えられる。その場合、①に詠まれる「人目」は恋人ではなく、冬の山里には人が出入りしないことを広く述べているものと考えられ、②は躬恒が「物へまかりける人」が帰らない不満を詠んでいるのだと素直に解すればよいことになる。

③④は恋部に収載される。③は「枯れ果てる後のことも知らずに夏草が深く茂るように、いつか「離れはてる」後のことを知らないで、深く相手のことが思われる」と、後先を考えずに相手を深く思う恋心が詠まれる。また、④は「私が相手のことを思っているにも、「離れ」る人をどうしようか。満足しないうちに散ってしまった花だと思って見よう」と、自分はまだ未練があるのに「離れ」ていく相手を花にたとえた歌である。いずれの歌も題知らずで詠歌状況は不明であり、「離る」のが男女どちらなのかを判別できる表現は見出したい。

『日本国語大辞典』⁷⁾によると、「離る」という語は「空間的、時間的、心理的に対象との間隔が大きくなる」ことだという。①②の歌でいうと、人が自分のいる所にやって来ないことを「離る」といっており、相手との空間的な間隔の発生を意味すると考えられる。一方、恋部に収載される③④は、男女の間に空間的、時間的、心理的な距離の発生、いずれに当てはめても解釈可能である。つまり、男

女が遠く離れた所にいる、何らかの理由で男女が長い時間逢わない、男女の愛情が冷める、という複数の状況を想定することができる。

③④は、男女どちらが主体となるかを決定づける要素はない。例えば、③ならば「相手が遠くに行ってしまった後のことなど何も知らずに、その人のことが深く思われることだ」と、いずれ遠くへ離れていく相手を深く思う歌であるとも解することができる。もちろん、「二人の愛情が冷めてしまった後のことも知らずに」、「長い間逢わなくなる後のことも知らずに」、としても解することができる。

④に関しても、「自分はまだ相手のことを思っている、遠くに行ってしまう人をどうしようか」、あるいは、「長い間逢わなくなる人をどうしようか」、「私への愛情が冷めていく人をどうしようか」と詠む三句目までに對し、相手のことを「満足しないうちに散ってしまう花だと思うことにしよう」と詠む。歌から読み取れるのは相手に對する未練や諦観であり、男女どちらの立場で詠まれたと考えても不自然ではない。実際に、久曾神校注は③の現代訳を「すつかり別れてしまう後のことは考えないで」とし、男女のどちらの立場で詠まれたとも解せるような表現を用いている。

では、③④が女の立場で詠まれたと解されるのはなぜなのだろうか。『古今集』の注釈書の中でも、男女どちらの立場で詠まれたかを積極的に検討する傾向にある片桐全評釈は、④の「鑑賞と評論」において、「古今和歌集」に用いられる「離る」について、「枯る」や「刈る」と掛詞として用いられても「すべてが「男の足が遠のく」意であると言つてよい」とし、①から④の歌を女の立場で詠まれたと解している。

また、窪田評釈は③について「深くも男を思っている女の、思う

余りに行末に不安を感じて、それだからとてどうにもならない心を嘆いたものである。(中略) 一夫多妻の当時とて、この不安は、例の多い、当然のものであったのである」として、いつか男が通つて来なくなることを想定した上で不安を感じる女の歌であるとする。新編全集は④について女の立場で詠んだとは明記しないものの、第三句までを「私が慕わしく思っているも訪れが途絶えてしまう人をどうしたいだろうか」と現代語訳しており、女の立場で詠んだ歌として解していることがわかる。

(2) 女の立場で詠まれる「離る」

「離る」という語は男女どちらが主語となつても解し得るのに、なぜ①～④は「男の足が遠のくこと」、つまり、夜離れを意味するものと解されるのだろうか。明確な根拠は見出しがたいが、①②④は共通して相手が自分から「離る」ことを詠んでおり、女の立場で詠んだ歌として解した場合、男の夜離れという憂き目に遭い、成すすべのない女の姿が浮かび上がる。

『角川古語大辞典』の「離る」の項目には、「男女の間がうとくなっている。愛情がうすれる。妻問いの足が遠のく意から転じたもの」と、「離る」という語自体に、男が女のもとに通わなくなる意を読み取ることができる。この場合、「離る」というだけで「男が夜離れる」、つまり、「離る」の主語が男に限定された表現ということになる。近藤みゆき氏によることばにおける男女の領域についての研究では、「離れゆく」という語は女性歌人のみの使用で、女性性の高い表現であることが指摘されている。⁹⁾これらのことを踏まえ、『古今集』において女の立場で詠まれたことが明確な「離る」

を詠んだ歌を見ていきたい。

《女の立場で詠まれた歌》

題しらず 小野小町

⑤ 見るめなきわが身をうらと知らねばやかれなで海人の足たゆく
来る
(恋三・六二三)

題しらず よみ人しらず

⑥ 誰が里に夜離れをしてか郭公ただここにしも寝たるこゑする
(恋四・七一〇)

あひ知れりける人のやうやくかれがたになりける間に、焼
けたるちの葉に文をさしてつかはせりける 小町が姉

⑦ 時すぎてかれゆく小野の浅茅には今は思ひぞたえず燃えける
(恋五・七九〇)

物思ひけるころ、物へまかりける道に野火の燃えけるを見
てよめる 伊勢

⑧ 冬がれの野辺とわが身を思ひせば燃えても春を待たましものを
(恋五・七九一)

右に掲げた四首のうち、⑥は詠み人しらず、他は全て女性歌人の
歌である。⑤の小町の歌は題知らずで詠歌状況は不明だが、相手と
逢う折のない我が身のもとへ「離れ」ることなくやって来る人を、
海松布のない浦と知らないからか、「離れる」ことなくやってくる
海人と重ね合わせて詠んでいる。この場合の「離れなで」は「途絶
えることなく」、つまり、時間的間隔をあけることなくという意で
用いられている。しかし、「足たゆく来る」と続くことから「夜離

れをすることなくやって来る」という意につながる表現となってい
る。

また、⑥はよみ人しらずで作者の性別は不明だが、「誰が里に夜
離れをしてか」と、はっきりと「夜離れ」を詠んだ歌となっている。
男をほととぎすに譬え、「どこを夜離れして私の所に来たのか」と、
女の立場で男に皮肉を込めて詠んだ歌と考えられる。

⑦⑧は詞書から、実際に女性歌人が襲の歌として詠んだ歌である
ことがわかる。⑦の詞書には「やうやくかれがたになりける」と
あり、恋人が「離れがた」になっているという小町が姉の置かれて
いる状況が示される。歌に詠まれる「かれゆくを」は、「枯れ」と
の掛詞で、恋人の男は「離れ」てゆくが、私は今も思い続けていま
す、と詠み贈ったものである。

また、⑧は「枯れ」と「離れ」を掛詞とするか、という根本的な
問題はあるものの、「離れ」を掛けているものとして考えると、「恋
人が「離れ」ていった我が身を冬枯れの野辺と思えば、野焼きに
よって再び春の訪れを待つものを」と詠む歌となる。題詠ではなく、
伊勢の個人的な物思いを詠んだ歌であることが詞書に記されている
こと、恋部に収載されていることから、「離る」のは恋人の男とい
うことになるだろう。

⑦⑧に詠まれる「離る」は、⑤⑥のように夜離れを意味すると決
定づける要素はなく、心理的・空間的な間隔を「離る」と詠んでい
ると解することも可能である。しかし、女の立場で詠まれた歌にお
いて、心理的・空間的・時間的、いずれの距離が男側に生じたとし
ても、男女の仲に起こり得る現象は「夜離れ」であることは確かだ
ろう。たとえば、⑦を「恋愛の全盛期を過ぎて、あなたの心が離れ

てしまった私」と現代語訳したとしても、男の心が離れて疎遠になることで夜離れが生じているであろうことが想定される。男が女のもとへ通う当時の恋愛様式ゆえ、恋愛関係を継続させるためには男が女のもとへ通い続ける必要があった。そういった意味では、女性はどうしても受け身にならざるを得ず、通うか夜離れするかは男次第ということになる。

本来「離る」という語自体に男女性があるわけではないが、男が女のもとへ通う当時の恋愛様式から、女の立場で男が「離る」ことを詠んだ場合、それが心理的・空間的な距離を意味していたとしても、結局は「男が女のもとへ通わなくなる」という意に通じているのである。女の立場で詠まれていることが確かであれば、男が「離る」ということは「夜離れ」を意味すると解しても過大解釈とはいえないのである。

三 「離る」の周辺

(1) 閨怨詩の世界観と「離る」

女の立場で詠まれた⑤⑥のうち、⑤と⑥の二首は、自分の所に男が通って来ている状態で詠まれた歌である。それに対し、⑦は疎遠になっていく男に対し、「私は今でもお慕いしています」と男へ贈っている。疎遠になりつつある男を繋ぎとめようと働きかけていることから、まだ完全に縁が切れていない段階の歌と読み取ることができる。また、⑧は物思いの最中に野火を見て、「自分は冬枯れの野辺ではないので再び春が訪れることは期待できない」と、終わった恋への諦めの気持ちで詠まれている。

では、男性歌人が女の立場で詠んだと指摘される歌の場合はどう

であろうか。①④が女の立場の歌で詠まれ、「離る」が夜離れを意味すると仮定して検討する。①は男が訪れなくなると思うと、山里の冬は寂しさがまさるという心細さと嘆きを詠む。②は待ちもしない新年は来たが、自分が待つ男は訪れもしない、という不満や怨み、嘆きといった心情を読み取ることができる。③はいつか男が夜離れることも構わずに深く思うとし、相手が離れてゆくことを予感し、不安を抱きつつも恋の思いを深めていく心が詠まれている。④は、自分はまだ思っているのに、通って来なくなった男をどうすればいいのか、満足しないうちに散っていく花だと思って見よう、と、嘆きと諦めの境地に至る心が詠まれている。

「離る」という語が実際に女の立場で詠まれた歌では、男への皮肉や、疎遠になりつつある男に働きかけるような歌も見られた。その一方で、男性歌人が女の立場で詠んだと指摘される歌は、恋人に対する不安や男の夜離れに為すすべのない嘆きが、独詠的に詠まれる傾向が強い。このような歌は、中国の閨怨詩の世界観に通じると解することができるだろう。閨怨詩は、出征や旅に出て帰らない夫や、訪れの絶えた男を待つ女を主題とした詩である。『古今集』歌人の歌に閨怨詩の影響が見られることについては、山口博氏や中野方子氏などによって明らかにされてきた。

山口氏は「小町閨怨」の中で、小町が「衰残」という閨怨詩の素材を取り入れていたとし、「容貌の衰退を嘆くのは、男に見捨てられていたずらに年を経ることに由る」と指摘する。女の立場で詠まれたと指摘される②には「わが待たぬ年はきぬれど」とあり、直接的に容貌の衰えは詠んでいないが、恋人が訪れぬまま、いたずらに年を重ねることを嘆く女の姿を見出すことができる表現だとも解す

ることができると。

また、中野氏は、閨怨詩の類型素材・類型表現が『古今集』の歌語に大きな影響を与えたことを明らかにされたが、その中に「深草の里」という類型素材についての指摘がある。¹¹⁾中野氏によると、閨怨詩において「草の繁茂」とは、主(夫)のいなくなった家のさまを表す」表現だという。さらに、「棄捐された女性に「草」を配する型は多」く、それが日本の漢詩や和歌の表現にも受け継がれているとする。男性歌人が女の立場で詠んだと指摘される^③では、「夏草の深くも人のおもほゆるかな」と、いつか離れ果てることも知らずに人を深く思うことの比喩として「いつか枯れ果てることも知らずに夏草が深く茂る」ことが詠まれる。中野氏の指摘を踏まえると、^③において夏草は深まる思いをたとえるだけでなく、いつか男に捨捐されることを暗示するような役割も担っている可能性が考えられる。

男の不在を女が嘆くという閨怨詩的な発想や類型素材が和歌に取り入れられていく中で、^②や^③も閨怨詩的な発想で女の立場で作られた可能性は大いにある。

『古今集』の時代に、このような歌が盛んに詠まれるようになっていく中で、「離る」という語は「男が夜離れする」意で用いられ、それを嘆く女の立場で歌に詠まれることで、より女性性の高い歌語となった可能性が考えられる。

(2)『古今集』前後における「離る」

『古今集』が編まれる前後の時代では、「離る」という語はどのよう歌に詠まれていたのだろうか。『古今集』との比較を通し、『古

今集』における「離る」の傾向を検討してみたい。

長屋王、馬を奈良山に駐めて作る歌二首

⑨ 佐保過ぎて奈良の手向けに置く幣は妹を目離れず相見しめとそ

(万葉集・卷三・三〇〇)

⑩ 思ふ故に逢ふものならばしましくも妹が目離れて我居らめやも

(万葉集・卷十五・三七三)

家にありける梅花の散りけるをよめる 貫之

⑪ 暮ると明くと目離れぬものを梅花いつの人まにうつろひぬらむ

(古今集・春上・四五)

『万葉集』において、恋の歌として「離る」を詠んだ歌を見てみると、^⑨^⑩は男の立場で「目離る」という複合語を用いて「目から離れることなくいつも妻を見させ給えという気持」¹²⁾を詠んだ歌を見出すことができる。『古今集』においては、貫之の歌が同様に「目離る」を詠んでいるが、目から離れることなく見ていたのは梅の花であり、女に対して用いたものではないことがわかる。

⑫ 二上に隠らふ月の惜しけども妹が手本を離るるこのころ

(万葉集・卷十一・二六六八)

紀利貞が阿波介にまかりける時に、むまのはなむけせむとて今日と言ひおくれりける時に、ここかしこにまかり歩いて夜ふくるまで見えざりければつかはしける 業平朝臣

⑬ 今ぞ知る苦しきものと人待たむ里をば離れずとふべかりけり

(古今集・雑下・九六九)

『万葉集』所載の⑫には「妹が手本を離るるこのころ」とあることから、男が女のもとを訪れていない状況であることがわかる。男は、「二上に隠らふ月の惜しけども」と、女のもとへ行けないことを「惜しい」とする。一方、『古今集』の⑬は、送別会をしようとしたが姿を現さなかった利貞に業平が詠んだ歌である。人を待つのは苦しいことだと今になってわかった、私を待つ人がいる里を間をあけることなく訪れるべきであった、とする。待つ人を女と解すると、女が待っていることを知りつつも夜離れしていたことを、男である業平が後悔する表現となる。『万葉集』において「離る」ことは男にとっても耐えがたく辛いものとして詠まれていたが、『古今集』においては男が「離る」のを女が嘆くという前提のようなものを垣間見ることができると。

『万葉集』との比較を通し、『古今集』における「離る」という語の女性性の強さが再確認できたが、少し時代を下ると、次のような歌も見出すことができる。

秋ごろ

⑭ 忘れじと結びし野辺の花薄はのかにも見でかれぞしぬべき

返し

⑮ 結びおきし袂だに見ぬ花薄かくるともかれじ君がとかずは

(敦忠集・一一四・一二五)

女につかはしける

⑯ たのむ木もかれはてぬれば神な月時雨にのみもぬるころかな

(後撰集・秋下・四五二)

⑭⑮は、藤原敦忠の贈歌に雅子内親王が返歌した贈答歌である。敦忠は天慶六年に三十八歳で薨じており、生年は延喜六年と考えられる人物で、『古今集』より少し後の歌人である。忘れないと約束した野辺の花薄は少しも見ないうちに枯れてしまった、という文脈に、掛詞を用いて「少しも逢えないうちにあなたは離れてしまった」と、男である敦忠から雅子内親王に詠んでいる。これを受けて雅子内親王は「隠れるとしても離れはしません」という旨の答歌を送っており、恋の歌において女が「離る」ことが詠まれた贈答歌となっている。

また、『後撰集』所載の⑯は「枯れ果てぬれば」に「離れ果て」を掛け、頼りにしていたあなたも「離れ果てて」しまつてので、時雨のような涙に濡れる今日この頃です、と詠む。「女につかはしける」という詞書から、この歌も男から女へ贈られたものとして収載されていることがわかる。

女が「離る」という表現は、もちろん夜離れを意味するのではない。女が男のもとから「離る」とは、どのような状況をいうのであろうか。

五条后宮の西の対に住みける人に本意にはあらでもの言ひ
わたりけるを、正月の十日あまりになむ他所へ隠れにける、
在り所は聞きけれどえ物も言はで、又の年の春梅の花盛りに
月のおもしろかりける夜、去年を恋てかの西の対に行きて
月の傾くまであばらなる板敷に臥せりてよめる

在原業平朝臣

⑰ 月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはものと身にして

(古今集・恋五・七四七)

男の心やうやう離れがたに見えゆきければ 土左

⑱ つらきをもうきをもよそに見しかどもわが身にちかき世にこそ

有りけれ

(後撰集・恋三・七四九)

男の心つらく思ひ離れにけるを、女なほざりになどかおともせぬといひつかはしたりければ よみ人しらず

⑲ 忘れなんと思ふ心のやすからばつれなき人をうらみましやは

(後撰集・恋三・七八〇)

まず、女が男から物理的に離れることが想定できる。⑰は男が逢いに行くのでできない所に女が住居を移したことが詞書に記される。「離る」とは記されないが、このような状況も、女が「離れ」たということになるだろう。また、⑱⑲は詞書に「心やうやう離れがたに見えゆきければ」、「心つらく思ひ離れにける」とあり、心や思いが「離る」とする。男が女の「離る」を詠む歌は少なく、⑱⑲も男が「離る」ものではあるが、「離る」が心理的間隔に対しても用いられていたことが確認できる。よって、女の心が男から離れるという状況も想定することができる。

最後に、女の立場で詠まれたと指摘される③の躬恒の歌が、躬恒の私家集『躬恒集』において、「女に」という詞書を有して収載されていることにも触れておきたい。『古今集』では題知らずで恋四に収載されたこの歌は、『躬恒集』では躬恒が女へ詠み贈った歌として収載されている。¹³

女に

かれはてんのちをばしらで夏草のふかくも人のおもほゆるかな

(躬恒集・三一九)

このように、『古今集』から少し範囲を広げてみると、男の立場から女が「離る」ことが詠まれる歌の存在も確認することができる。明らかに女が「離る」ことを詠んでいる歌の例は少なく、男が「離る」ことを詠む歌が多いのは事実であるが、女の心が男から離れてしまうことは、当時でも当然起こり得たものと考えられる。女が「離る」ことが詠まれている可能性も念頭におくべきであろう。

おわりに

「離る」という語は、男の夜離れを意味するだけのものではなく、男女どちらも主語となり得る言葉である。よって、相手が「離る」のを嘆く恋歌であったとしても、「離る」という語を根拠として、女の立場で男の夜離れを嘆く歌であると判断することはできない。しかし、女の立場で男が「離る」ことを詠んでいることが判明している場合、「離る」という語は、そのまま「夜離れ」に通じる表現となる。さらに、『古今集』の時代には閨怨詩の影響を受けた歌が多く詠まれており、「訪れの絶えた男を待つ女」が一つのテーマとなっていたと考えられる。したがって、『古今集』に収載される相手が「離る」ことを詠む歌は、男性歌人の作であっても女の立場で詠まれた蓋然性が高いと認められる。

また、『古今集』前後の歌集には、明らかに男の立場で「離る」ことを嘆く歌や、女が男から「離る」ことを詠む歌の存在が確認できる。ただし、「離る」という語をこのように用いた歌は『古今集』

には撰集されておらず、『古今集』において詠まれた「離る」という語は女性性が高い語であると考えられよう。

注(1) 鈴木日出男『古代和歌史論』（東京大学出版・平成二年）

(2) 青木生子「女歌の意味するもの」（『文学・語学』全国大学国語国文学会編・一五五号・平成九年九月）

(3) 後藤祥子「女流による男歌」（『日本文学をよみかえる 3 和歌とは何か』有精堂出版・平成八年）

(4) 小嶋菜温子「恋歌とジェンダー―業平・小町・遍昭―」（『国文学解釈と教材』の研究』学灯社・第四一巻十二号十月号・平成八年）

(5) 近藤みゆき『古代後期和歌文学の研究』（風間書房・平成一七年）

(6) 『古今和歌集』注釈書一覽（括弧内に略称を記す）

・金子元臣『古今和歌集評釈』明治書院・明治三四～四一年（新訂版昭和二年）（金子評釈）

・窪田空穂『古今和歌集評釈』東京堂・昭和一〇～一二年（改訂版昭和三年・角川書 店版窪田空穂全集所収）（窪田評釈）

・松田武夫『新釈古今和歌集 上・下』風間書房・昭和四三・五〇年（松田新釈）

・小沢正夫『日本古典文学全集 古今和歌集』小学館・昭和四六年（全集）

・竹岡正夫『古今和歌集全評釈 上・下』右文書院・昭和五一年（補訂版昭和五六年）（竹岡全評釈）

・奥村恒哉『新潮日本古典集成 古今和歌集』新潮社・昭和五三年（集成）

・久曾神昇『講談社学術文庫 古今和歌集』全四巻・講談社・昭和五四～五八年（久曾神校注）

・小島憲之・新井栄蔵『新日本古典文学大系 古今和歌集』岩波書店・

平成元年（新大系）

・小沢正夫 松田成穂『新編日本古典文学全集』小学館・平成六年（新編全集）

・片桐洋一『古今和歌集全評釈上・中・下』講談社・平成一〇年（片桐全評釈）

・高田祐彦『角川ソフィア文庫 古今和歌集』角川書店・平成二一年（高田校注）

・小町谷照彦『古今和歌集』筑摩書房・平成二三年（小町谷校注）

(7) 『日本国語大辞典』第二反（小学館・平成一三年年）

(8) 『角川古語大辞典』（角川書店・昭和五七年）

(9) 近藤みゆき『王朝和歌の研究』（笠間書院・平成二七年）第一部付録「和歌とジェンダー―ジェンダーからみた和歌の「ことば」の表象―」

(10) 山口博「小町閑怨」（『中古文学』二二・昭和五三・九月）

(11) 中野方子『平安前期歌語の和漢比較文学的研究―付 貫之集歌語・類型表現辞典』（笠間書院・平成一七年）

(12) 『新編日本古典文学全集 萬葉集』①（小学館・平成六年）三〇〇番歌頭注

(13) 「をんなに」という詞書は、第一類本の宮内庁書陵部蔵光俊本『躬恒集』（五一・二八）、第三類本内本系の宮内庁書陵部蔵御所本『躬恒集』（五一〇・一二）、五〇一・二三五に見られる。

※『万葉集』の本文は『新編日本古典文学全集 萬葉集』（小学館・平成六～八年）に拠る。その他の和歌は、『新編国歌大観』（角川書店）に拠り、適宜表記を改めた。